

【会員だより】

広島大学病院 画像診断部門の紹介と取り組みについて

広島大学病院 診療支援部 西丸 英治(短大2回生)

広島大学病院の放射線部は、創立45年目となり診療支援部が設立されてから17年目となります。2019年に業務の効率化を目指して3部門から画像診断部門、放射線治療部門の2部門に再編しました。私は画像診断部門に所属しており、総勢41名で各モダリティ(CT、MRI、血管造影、核医学、一般撮影、歯科、DR)の業務を担っています。

画像診断部門のアピールポイントを少し各モダリティで記述させていただきます。

まず、一般撮影では全てFPD化し(ポータブル含む)、低被ばく・高画質の画像を提供できるようになりました。また、整形撮影用にモバイルFPDを各撮影室に導入し業務効率が大幅に改善しております。

血管造影では、58インチ(8M)の大型モニタ(EIZO:CuratORソリューション)をハイブリッド手術室に導入して検査室内に居ながら操作室内の複数のモニター・キーボード・マウス制御を1台のモニター・キーボード・マウスで統合・制御し業務の効率化と医師の指示への即時対応を可能としました。

また、最近ではTEVER、EVER、TAVIに加えMitraclip、WATCHMAN、Flow Diverter Stent、経皮的卵円孔閉鎖術、AVM(IVR+摘出術)等の手技を行っています。

CTは、機器メーカーと共同研究を行っており、MBIR、DLR、DE再構成画像の調整と基礎データの提供と画質検討を行っています。現在、320列(2台)、256列、160列の計4台の装置を症例・研究に合わせて稼働しています。MRIでは3Tの装置を4台整備しており、一部は機器メーカーとの共同研究で腹部領域の画質向上のためシーケンスの調整に尽力しています。

核医学では今年度PET-CT、SPECT-CTの更新を予定しており、同時に機器メーカーとの共同研究ワーキングも立ち上げ特許取得を目指しています。当院では小児患者に対して検査前のプレパレーションを医師、看護師と連携しながら積極的にチャレンジしており、現在はCT、MRI、核医学検査において少しでも鎮静リスクを回避する努力をしています。また、CT、MRI、核医学の検査室は、患者様の緊張を少しでも和らぐ目的ですべての装置にテーマ別に装飾を施し、小児患者様からは好評を得ています。(図1、CTの一例)。

研究活動においては、当部門に学位取得者(博士:7名、修士:8名)が在籍し、学位取得者を中心に研究ミーティングを定期的に行いながら若手への指導と研究のブラッシュアップを行っています。

さらに当院には広島県診療放射線技師会会長と理事、日本放射線技術学会中国・四国支部支部長、理事が複数名在籍しており、両学会の事業に積極的に若手の構成員を参加させています。

学会の事業を経験することで社会に関わり診療放射線技師としての技術および社会人としての育成と社会貢献を目指しています。

その他広島大学は、高度被ばく医療支援センター・原子力災害医療・総合支援センターとしての活動も行っており、福島第一原子力発電所事故の発生時には福島県に延べ人数で約2,000名現地に派遣し、活動を行ってきました。現在では該当の施設に対して原子力災害医療の指導を定期的に行っています(図2、実習の様子)。

広島大学病院および画像診断部門の活動について簡単にご紹介させていただきました。当部門にご興味のある方がおられればいつでも施設見学対応が可能です。

※執筆時は新型コロナウイルスの影響により外部の見学・実習は中止となっています。

※執筆時は新型コロナウイルスの影響により外部の見学・実習は中止となっています。

以上

